

2019年10月23日（火） 於：鹿児島サンロイヤルホテル

第57回 全国知的障害者福祉 関係職員研究大会（鹿児島大会）

「未来へ!! 福祉の力と共生社会」

基調講演「脆弱性と境界をこえる様々な取組み」

鹿児島国際大学 馬頭忠治（ばとうただはる）

1. 私に与えられたテーマは、アカデミックに、現場のニーズの発生源を探り、未来を予感することである。それをアカデミックに下記のような図1となり、日本の戦後体制に照らして見れば図2のようになる。そこで、まず、この二つの図を説明して、現場のニーズとは何かを探っていく。

すなわち、戦後日本は企業、福祉、学校、病院、都市を制度的に整備して経済大国になったことを学ぶ。

2. 2では、この制度が日本的な「公」と「私」、その分離によって設計されたことを日本国減法を踏まえて学ぶ。

3. 身寄り問題やひきこもり問題を事例に、「公」をだれがどう担っていくかという「公共性の転換」を見ていくために、地域福祉の可能性を探る。地域は、境界線がはっきりとしないため、ネットワークを束ねてコミュニティを多様につくりやすく、コミュニティソーシャルワークという新しい仕事が、地域の福祉をつくるといった新しい動向を見ていく。

4. そのなか、農福連携や芸福連携といったセクターを超えるさまざまな取組みが模索され、脆弱な人びと、障害を持った人びとが、その第一線に立ち、新しい働き方や支援の仕方が生まれていることを紹介する。

5. そして、最後に、そうした現場での新しい実践が、新しい働き方を作り出し、社会と経済をかえていこうとする取組みにもいることを確認していくことで、皆さんの現場のニーズを捉え直し、未来と一緒に共感していきたい。

*自己紹介

1952年大阪府生まれ

研究業績：『ボランティアエコノミーと地域形成』（日本経済評論社）、『脱マネジメント論』（晃洋書房）、『アソシエーションとマネジメント』（ラグーナ出版）。

社会活動：NPO法人「かごしまホームレス生活者支え合う会」理事、「やどかりサポート鹿児島」運営委員、フレンズFMイブニングラジオ、パーソナリティーなど

図1. 世界史像の模索－ポスト・モダンをどう構想するのか－

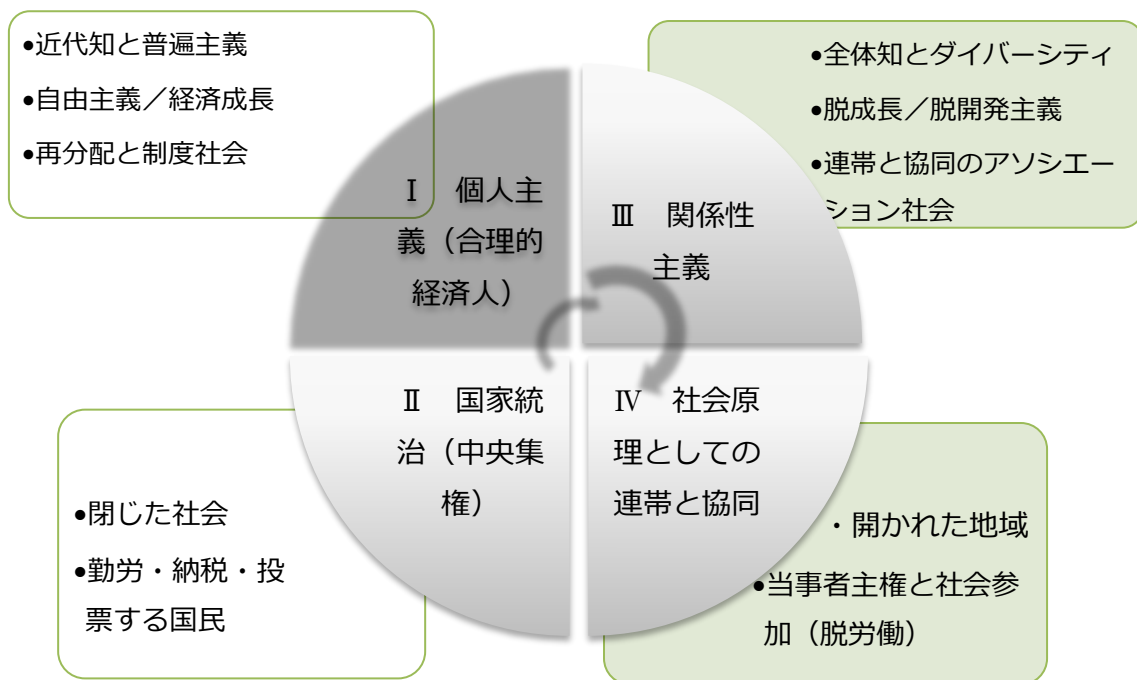


図2. 戦後の経済体制とその後の変化

